

試験研究成果の活用状況調査結果

研究機関	課題名	内容	活用状況	アドバイザーコメント
衛生研究所	結核菌のRFLP法による分子疫学的調査研究	結核菌のRFLP分析法を確立し、医療機関等の協力を得て結核菌株の提供を受け、RFLP分析を実施した。	平成17年度以降も引き続き結核菌のRFLP分析を実施している。その結果、発症時期が大きく異なるにもかかわらず、集団感染の一部であることが明らかとなった事例や、2人の患者間に一定の接触がありながらも異なる感染経路を有することを示した事例などを報告した。	非常に有益な知見の得られる検査法であるため、講習会及び研修会において、広く技術伝達していくことが望まれる。
ハイテクプラザ	亜鉛めっきのクロムフリー化成処理技術	主に防錆を目的とした亜鉛めっき品の表面処理である従来のクロメート処理に替わって、新しくクロムを使わずにタンニンを使った処理方法を開発した。	この研究を引き継いだ研究を平成17年度から実施しており、問い合わせのあった県内外の企業と連絡を取りながら実用化に向けた評価、改良研究を経て、現在、企業の生産工程にすぐにも還元できるレベルにまで仕上がっている。関連特許は4つを数えるに至っている。	優れた技術開発であると思うが、実際に工業的使用されている材料を置き換えるためには多くの努力を必要とする。研究者ばかりでなく明確なミッションを与えた専門家の協力が不可欠である。
ハイテクプラザ	スーパー繊維を活用した産業資材の開発	地域産業の活性化を図るため高強度・高弾性率・高耐熱性を有した繊維、いわゆるスーパー繊維と呼ばれる繊維の加工技術を確立し、この繊維を活用した産業資材の開発を行った。	三次元無機繊維織物の製造方法の開発により特許を取得した。この技術について、宇宙航空機や自動車メーカー等より数多くの問い合わせがある。	開発技術に関して多くの問い合わせを得ているようであるが、試作品の提供など確実な対応が必要である。また、県保有特許を県内企業に使用してもらえるような制度整備も必要と思う。
ハイテクプラザ	福島県産ブランド清酒の開発	福島県オリジナルブランド清酒を開発するため、福島県オリジナル米「夢の香」、「ふくみらい」を使用して特色ある山廃純米大吟醸酒、大吟醸酒の試験醸造を行った。	「夢の香」の醸造特性については、以前から研究が行われていたが、本研究により、酵母との相性や醗管理の方法などより具体的な米の特性を把握することができ、本県を代表する「夢の米・夢の酒」清酒として20社あまりが製品化して高評を得ている。また、「ふくみらい」に関しては、本来は食用米であるが酒造用米としても蔵に入荷しているが、その特性についての問い合わせに対し、本研究により対応が可能となった。	1024株から3株が吟醸酒用酵母として得られたことは、地道な日常の成果であったと考えます。オリジナルブランド清酒確立のため一層尽力下さい。
農業総合センター	ふくみらいの栽培法に関する試験	農業試験場本場、会津地域研究支場、相馬支場において「ふくみらい」の施肥法、刈取時期について検討した。	得られた成果を元に各地域ごとに「ふくみらい」の栽培歴が作成され、各農林事務所農業普及部・普及所やJA等による栽培指導に活用されている。	高温登熟条件下で乳白粒となりやすいこと、冷害やもち病には強いことから、中山間地での特別栽培米としてブランド化する方針が良いと思う。また、今後、有機栽培に適するかの検討も必要ではないか。

<p>農業総合センター</p>	<p>環境保全型農業における環境負荷の軽減技術と評価法の確立</p>	<p>キュウリ、トマトの施設栽培において、慣行栽培(タイマー制御による灌水同時施肥システム)より総施肥窒素量および灌水量を削減した栽培方法を開発する目的で試験研究を実施した。液肥を灌水を兼ねて施用する灌水同時施肥栽培において、液肥の施用量を土壤水分センサーにより制御するシステムを構築し、キュウリ、トマトでの適切な液肥濃度と土壤水分値を求めた。</p>	<p>本試験研究の成果である土壤水分センサーによる制御システムの導入は進んでいない。</p>	<p>土壤水分センサーによる制御システムが製品化されていないことが普及のネックであり、製品化を進めることが必要であることは明白であるので、具体的な方法を示す必要がある。例えば、民間企業、独法や大学と連携し、競争的資金等の活用も必要である。</p>
<p>農業総合センター畜産研究所</p>	<p>乳用子牛の省力的群管理育成技術の確立</p>	<p>乳用子牛の育成方法として、余剰の初乳を発酵乳として調製する方法及びその給与が発育等に及ぼす影響について調査し、発酵初乳利用による育成技術の確立を図る。</p>	<p>県内酪農家の一部で活用されている。 活用農家では、子牛の発育に問題なく、後継牛の確保がなされている。</p>	<p>余剰初乳の発酵乳としての利用のあり方についての研究が活かされていることは望ましい。ただし一方で全乳哺育を取り入れる農家も増えているとすれば、どのような経営形態の酪農家に発酵乳利用が適切なのか、一定の見通しをもって、普及PRすることが必要と考える。</p>
<p>内水面水産試験場</p>	<p>天然アユと人工アユの判別方法</p>	<p>天然及び人工の由来の明らかな種苗について、それぞれ形質(下顎側線孔数、側線上方横列鱗数)を計数し、判別のための二次式を作成した。さらに、解禁前後に河川で採捕した由来不明の魚について、その形質計数値を二次式に入力し、由来を判別した。</p>	<p>当試験場は、平成16～18年度に木戸川において、本成果を用いて、天然魚、人工魚それぞれの場所別生息尾数や成長、釣獲割合等を調査した。この結果、解禁直前の生息尾数は約18～30万尾であり、このうち天然魚の占める割合は、16～17年が約9割、18年が約7割と推定され、その生息割合、釣獲割合は、下流域では多く、上・中流域ではやや少ない傾向がみられた。また、人工魚の方が成長が早いことがうかがえた。 さらに、本成果を用いて、井出川、四時川において天然遡上の実態を調査したところ、両河川とも下流を中心に天然魚の割合が高いことが推測された。</p>	<p>カワウ等の影響で遊漁者離れが進む中、遊漁者のニーズに対応し、漁協経営の向上のため研究成果を活用してもらいたい。</p>